

濱野 隆（お茶の水女子大学）

幼児教育

おはようございます。お茶の水女子大学の濱野と申します。お茶の水女子大学はここにもありますように幼児教育に関する派遣現職教員の支援を行っています。今日はまず幼児教育分野の青年海外協力隊について少しお話ししたいと思います。それから私どもの拠点システムの事業概要をおはなししたいと思います。3つめに実際に隊員の悩みとかニーズについて私どもの大学でも調査をしましたのでそれについてお話ししたいと思います。これは派遣前の隊員です。今の皆さんの状態という感じです。それから実際派遣された後、派遣中の隊員はじゃあ一体どんなことを考えどんなことで悩みそしてどんな支援ニーズを持っているのかということをお話ししたいと思います。

ここまでお話ししてきたんですけども、実はたぶんこの中に幼稚園教育か保育士でいられる方はいらっしゃらないんじゃないかと思えますけれども、もしいたらちょっと手を上げていただけますか。いらっしゃらないですね。そのこと自体が大きな問題というか、私どもの課題の一つなんです。後にお話ししますが、幼児教育で現職派遣される方というのは非常に数が少ないんですね。幼児教育分野の青年海外協力隊というのは実は途上国からの派遣要請は非常に多い分野です。ところが日本からの派遣が追いつかない状態なんです。非常に需要は多いんですけども供給が追いつかないという分野です。特に現職の派遣は難しい分野です。今日ここに一人もいらっしゃらないことがそれを象徴していると思うんですけども。どうしてこの現職派遣システムで幼稚園の先生がでるのが難しいかというと、要するにまず公立の幼稚園が少ない。これは公立の学校しか利用できないシステムですね。それから公立幼稚園の先生は年齢が非常に高い。平均年齢で40歳を超えていますので、青年海外協力隊というのはご存じのように39歳までですので公立の幼稚園では対象となる先生が少ない。それから公立の幼稚園は義務教育ではないので財政的に非常に厳しくてどこでもぎりぎりで行っている。もちろん小中学校とてぎりぎりで行っているところは非常に多いと思うんですけども、幼稚園の場合たとえば、まる4の人員配置を見ても分かるように、ある幼稚園に行ったら先生7人いました。ただそのうち正職員、つまり常勤職員が二人なんです。7人中2人が常勤で残りの5人は非常勤なんです。そういう場合、2人の常勤のうち一人が協力隊として出るのは非常に難しい状況なんです。それから5番目は幼稚園の場合は帰国後に開発教育とか国際理解教育ということで隊員経験を生かす場がそれほど多いとはいえません。多くの幼稚園を訪問していわれましたが、国際協力、非常に大事なことは分かりますが、今私ども現場では目先のことで手一杯なんです。短期的な課題をこなしていくことで大変なんです。とそういうことを言われました。これが幼児教育の青年海外協力隊の現状です。

ここからは現地の写真なども見ていただきながら、幼稚園の様子でありますけれども、隊員活動についてご案内したいと思います。ニジェールに派遣される方もいらっしゃるかも

しれませんがこれはアフリカのニジェールという国でこの女性が隊員ですね。幼稚園です。この藁で囲ってあるところが校舎ですね。ニジェールではわりとこういう校舎はあります。そうですね、日本とは全然違う校舎ですけれども、ここにボールが飛んでいますけれども、わかかを通して。こういう遊具を作っています。つまりもともと隊員が派遣されたときには遊具なんて全然ありませんでしたから、こういう遊具を作ってあげたりとか。それから現地は非常に衛生状態がよくなくてですね、子供たちが病気になったりします。最近国際協力の分野で幼児教育というのは実は結構注目されている分野で、早い時期からたとえば衛生とか、健康とか、あるいは言葉に関する教育をしておくことが小学校入学後のディスアドバンテージつまり貧困層の教育が、貧困層にとって小学校入学後の適応がうまくいくんだということがよく言われます。この隊員も現地で手を洗う習慣というのがなかったというか、あったんですけども、実は学校で手を洗うときに今までは大きなバケツに一人ずつみんなそこで手を洗ってですね、同じバケツで同じ水で次の子も手を洗ってということをやっていたわけですね。そうするとどんどん水が汚れていきますから、衛生上よくないと言うことで、隊員のアイデアでこういう蛇口をつけて、それで流れる水で手を洗えるようにする。当たり前のことだと思われるかもしれませんが、こういう当たり前のことも今まで実は教育現場ではできていなかったのですね。隊員の協力によりこういうことが可能になっているということです。それから手を拭く、これは日本の幼稚園でよく見られる光景ですけれども一人ずつこうした手ふきを用意してですね、一人ずつ名前を書いたりして、それで手を洗った後に手を拭くという、そういう指導をしています。後これは幼稚園の様子ですね。それからこれがですね、なんか大人が後ろの方にいっぱいいますけれども、これが日本でいう校内研修ですね。要するに幼稚園の先生が保育をしています、でそれを後ろの方で他の先生だとかあるいは指導主事、日本でいう教育委員会の人が見て、あとで授業研究をするという仕組みが、実はニジェール、世界でもっとも貧しく、もっとも人間開発が遅れている国ですが、そこでもこうした現職研修の仕組みがもうあるんですね。で隊員たちはこういうすでにある仕組みを生かしながら、現地の先生のトレーニングをしていくという活動もできます。これもそうですね現地の保育の様子です。それから先ほど JICA 事務所という話がでましたが、JICA 事務所も様々な支援をしています。これはポスターを作って先ほどの手洗い、手洗いにこだわるようですが結構重要で、手洗いの啓発のポスターを作ってそれで現地の幼稚園や教育機関に配布している、そういう写真です。

それで私たちの拠点事業なんですけれども主にやっていることは 3 つあります。それはまず、1 番目は協力隊活動の広報と???ですね。先ほども言いましたように、幼稚園の隊員というのは今日ここに誰もいらっしやらない、だからまず公立幼稚園の先生方に青年海外協力隊というものがあるということを知ってもらわなくてははいけませんね。協力隊というのはこういう制度でこういうことをやってくるんだ。それでやってきた人は、現場に帰ってこういう活動をしているんだと、そういうまず広報活動から始めなくては、お客さん

がないのに商品ばかり作っているようなそんな感じがしますのでまず活動の広報が 1 つ大きな課題です。それから 2 つめはすでに派遣されている隊員の方々、あるいは派遣前の訓練中の候補生に対して、お悩み相談ということで派遣前・派遣中・帰国後ということでメールで相談を受けつけたり、それからサンプルをお配りしましたが Q&A 集といって実際に寄せられた質問に対して様々な角度から回答したのも作ってあります。10:25 それから教材・資料の作成・配布したりということですね。例えば一部をお見せしますと、幼児教育ハンドブックという、これは昔の拠点システムで作ったものですね。日本語版と英語版があります。それからあと昔の拠点システムの報告書であるとか、EFA グローバルモニタリングレポートというもの、これを日本語に翻訳したのもですね。先ほどの幼児教育の国際動向なんかがあります。こうしたハンドブックであるとかあるいは日本の幼児教育、幼児教育の現場を紹介するビデオだとかあるいは活動を評価するツールであるとかそういったものを作っています。というのが 3 つ目の課題です。なのでこの事業全体はですね、現職の派遣を支援するものですがけれども、先ほど言いましたように私たちにとってはお客さんがいない状態ですので、もうちょっと一般隊員にも広げて全体的に幼児教育協力の質的な向上を図ることができればというふうに考えています。

それで実際にお悩み相談の内容なんですけれども、この中で駒ヶ根訓練所と二本松訓練所に行かれる方がいると思いますけれども、我々は二本松の方で調査をしましてどんなことで悩んでいますか、どんなことが不安ですかということをインタビュー調査してきました。で誰もが上げるのが語学、それから生活、そして現地情報の無さですね。これは必ず出る 3 つです。現地情報の無さということについてもある程度インターネットで情報を取ってこれるところだったらいいんですけど、ルアンダで初代なんですけれどもと言われると、我々もルアンダは分からないねとそういう話なんですけれども。それでですね、語学・生活・現地情報以外にもですね、例えば日本の幼児教育というのは国際的に見てね、優れているつまり途上国に出かけて行って伝えてくる価値のあるものなのかという、そういう質問とかですね、それから自分は日本の幼児教育は優れたものだと思うけれどもそれをどうやったら相手に伝えられるのかというそういう質問、これは実際に候補生の声から寄せられたものをそのまま載せていますので、全然モディファイしていない。それからですねこういう質問結構多いですね、相手だってね自分たちの教育には自信を持っていると思う、だとしたら我々外国から出てっていったい何しにきたのか、そういうふうに言われそう。それからあと早期教育の受験教育をやっているんじゃないのか、大学で保育者養成してくれという要請もあるんですね。でそういう経験は無いのですごく不安だとそういうことも寄せられています。これらの回答はですね、お手元にお配りした Q&A 集で帰国隊員と大学教員からの回答を載せております。

次に派遣中の隊員なんですけれども、派遣中の隊員が抱える悩みこれはいろいろです。派遣中といっても国は世界中に散らばっていますから、世界中それぞれ悩みは違うんですけども、ここでは中西部アフリカ、セネガルに調査に行ってきたので、セネガルの

様子を少しご覧いただきたいと思います。隊員たちがですね、広域研修ということで中西部アフリカ、セネガル・ニジェール・ガボンそういった国々から集まってお互いの悩みを打ち明けあっているそういう場面がございます。ちょっとビデオを。これはみんな隊員ですね。ポストイットに一人ずつ悩みとか困っていることを書き出して、貼り付けて分類して、こういうワークショップを今やっているところですね。・・・これをまとめたものがお手元にお配りした手書きの汚い資料です。こんなふうに悩みを分類しあった後に、じゃあその解決策をお互い考えていきましょうということで、開発とか協力ではよく PCM とか問題分析というのですけれども問題を出しあってそれを整理して、中心的な問題を1つ決めて、それに対して解決策を考えるというそういうやり方がございます。それで解決策を考えていくのがこの次のステップなんですね。こんな感じ、・・・中心的な問題と原因を対応させて解決策を考えていくというこういう作業です。

これに対して大学の教員というか、この現職は県のプロジェクトをやっているメンバーはいろんな指導をしたり、コメントしたり、専門的な見地から意見を延べたりそういうサポートをしております。

どんな悩みが派遣中の隊員から寄せられているかという、やっぱり任国の教育事情いろいろあります。それから文化の違い、要請と話が違う、これはたぶんそういう人もいるかもしれませんが、それから JOCV についての理解が乏しい、現地ではいかに JOCV が知られていないかとか、あるいは派遣先で位置づけがきちんとされていないということも時にはございます。それからカウンターパートとの関係、それから活動の内容や方向性、それから語学とコミュニケーションというのも常に付きまといます。具体的には教育事情はこのようなことで、それから文化の違いですね、それから要請に関しても人によって、自分がやらなくてはならない範囲が広すぎるといふ人と、何か点で個に対してアプローチしていくのでかえって広がり欠けるという、そういう対称的な悩みを打ち明ける方もいました。それから例えば上から 2 番目の人なんですけれども帰国直前なんですけれども、帰国直前にもかかわらず配属先で自分の位置が決められていない。それからこれもしばしばあるんですけれども、露骨に物を要求される、日本から来たんだから何か物をくれ、一番すごい例ではいきなりコピー機を要求されたという例もありますね。それから拒否したらプリンターになったとか、そういう例もあります。それからこういう内容も多いです。ようするに相手国には相手国の教育があるわけですよね、その国式の教育が。それに対して隊員がどこまで関与していいのか、介入していいのか、手を入れていいのか分からない、そういう悩みも多いです。どこまで日本的な考え方を伝えたらいいのかというのも悩む、それからコミュニケーションや信頼関係など様々です。で私の方からはいろんなコメントをして、拠点としては Q&A 集とか多言語にハンドブックを翻訳するなど対応をしております。もし何か幼児教育でなくてもかまいませんので、御質問・お悩み等ありましたらこちらの方へお願いします。それでは以上で、発表を終わります。

質問) ナミビアへ派遣予定の沢と申します。質問ではないんですが Q&A のサンプル集と

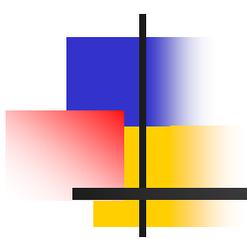
ということで、自分は理数科なんですけど、そういう理数科もあつたらいいなと思ひましたし、自分も教員やつていて何が参考になつたかというと先輩方の失敗談とか聞くとすごく参考になつたんで失敗談集みたいなものも集めていただけると得るところが多いんじゃないかと思ひました。

課題同士で質問しているようですが

結局この手書きの資料は何が問題だつたんですか。

いろいろな問題が出て、中心的な問題、二つのグループそれぞれに出してもらつたら、1つはAグループの方ですね、○Aと書いている方は、自分たちが提案している技術を現場に浸透させたい、例えば講習会とかワークショップとか教員研修に参加してもなかなかそれが定着しない、定着させるにはどうしたらいいかというのが中心的な課題なんです。

2つ目のBグループというのはニーズを知る、自分が隊員として派遣されて自分に何を求められているのか現場でのニーズは何か、それが分からないので活動の方向性が分からないというそういう隊員も多いですね。一般的なニーズは要請書に書いてあるんですけども実際現場に行くと全然違ふということもあります。ですので私たちからアドバイスとしてはニーズを調査する、ただしニーズを調査するといつても途上国ではアンケート調査とか慣れていない人が多くて、いきなりアンケート調査で、何が欲しいですかとか、何が必要ですかと聞いても、それこそ物をくれと書かれるそういうケースも多いです。なのでアンケート調査とか、インタビューを途上国でやる時にはどうしたら、どういうやり方で、どういうところに気をつけてやつたらいいのか。それからニーズ調査というと隊員の中にはいきなり“私に何やつて欲しい”とカウンターパートに聞く人もいますね。でもこれはちょっと変で、だつて私たちだつて何やつて欲しいと聞かれても、相手が何ができる人か分からなかつたら答えようが無いですよ。だからまず何か自分でやつてみる、自分はこれができる人なんだということを見せるということも大事ですし、それから観察ですね、調査するというよりはむしろ観察から、ここが重要なんじゃないか、ここがニーズじゃないかということが分かる。そういう調査・観察、それからニーズの聞き取りですね、そういったことに関して私たちとしては指導していくところです。2つ目のグループというのはニーズを知りたいというのが中心です。

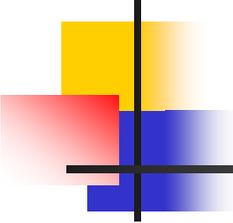


幼児教育

—幼児教育分野における派遣隊員支援と
幼児教育協力の質的向上—

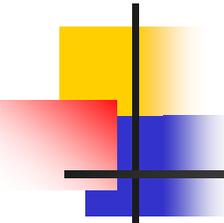
浜野 隆

(お茶の水女子大学)



発表の流れ

- 1. 幼児教育分野の青年海外協力隊
- 2. 本拠点事業の概要
- 3. 隊員の悩みとニーズ(派遣前)
 - ー二本松訓練所での調査からー
- 4. 隊員の悩みとニーズ(派遣中)
 - ー中西部アフリカJOCV調査からー



1. 幼児教育分野の青年海外協力隊

- 要請は多いが、派遣が追いつかない分野
- 現職派遣はさらに困難
- その理由
 - ①公立幼稚園が少ない(幼稚園は6割が私立)。
 - ②公立幼稚園教員の年齢(平均年齢42.2歳)
 - ③幼稚園の財政(国庫負担のある義務教育とは違い、どこもぎりぎりでやっている)
 - ④人員の配置:臨時職員が多く、常勤職員がJOCVとして出にくい。学級担任(1学級に1人の先生)
 - ⑤帰国後、開発教育という形で社会還元しにくい(隊員経験が評価される場面が少ない):「重要性はわかるんですが・・・現場は目先のことで手一杯なんです」

ニジェールの幼稚園で活動する隊員











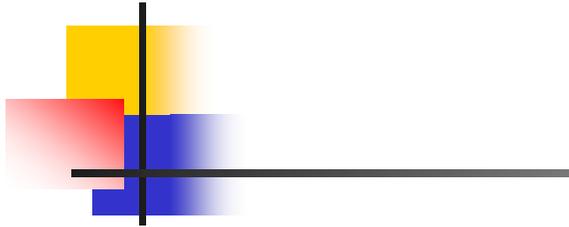


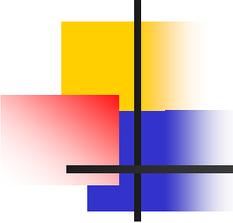








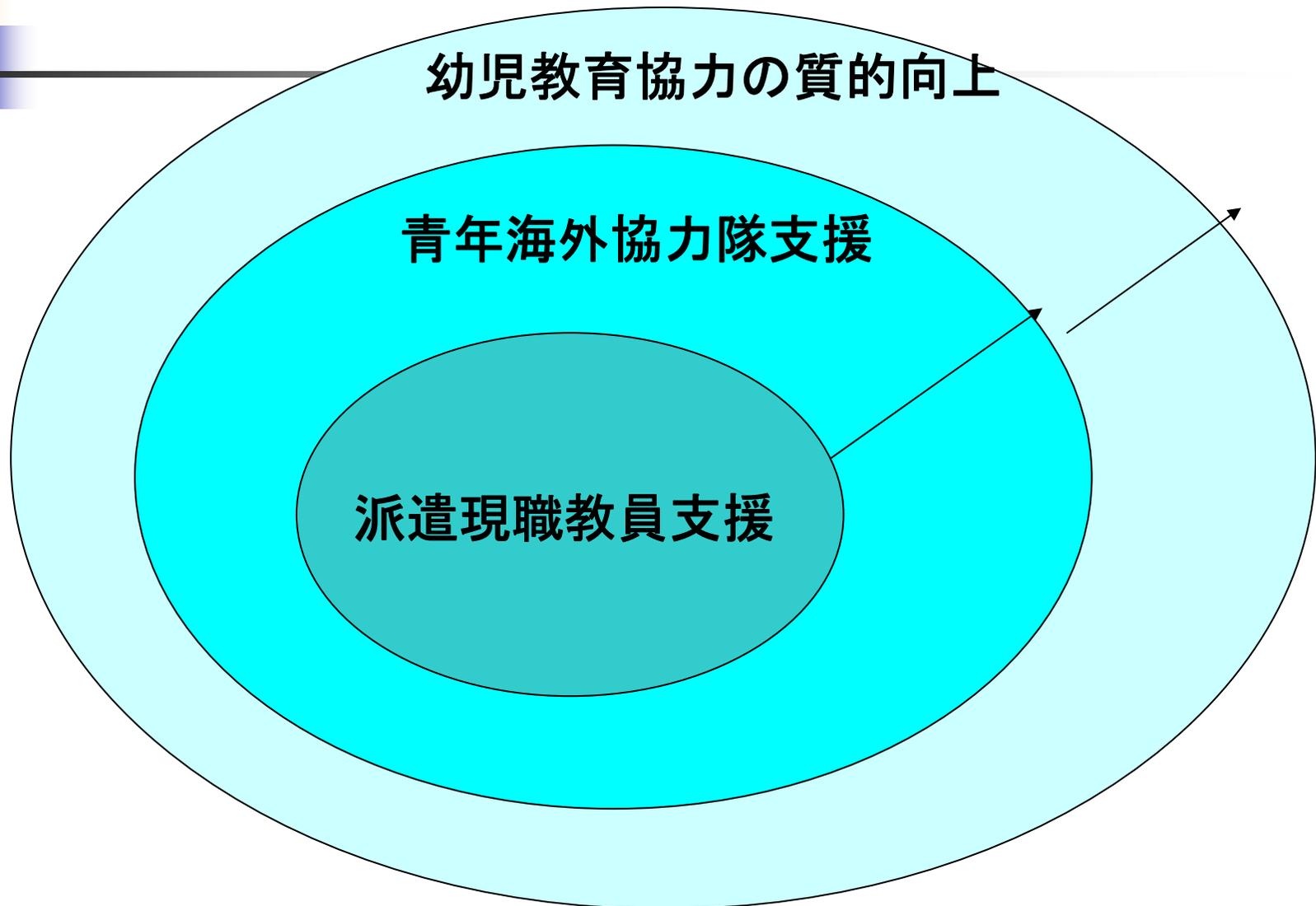


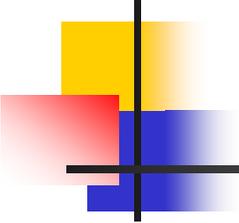


2. 本拠点事業の概要

- 1. 協力隊活動広報・調査
- 2. お悩み相談：派遣前、派遣中、帰国後
（メールでの相談、Q&A集の作成）
- 3. 教材・資料の作成・配布
（ハンドブック、ビデオ、国際動向パンフ、活動評価ツール）

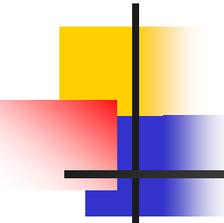
活動テーマ:「幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上」





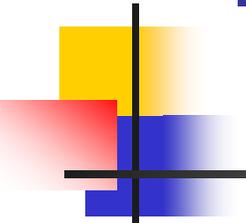
3. 派遣前候補生がかかえる悩み —二本松訓練所での調査より—

- ①語学と②生活の不安、③現地情報のなさ(教育現場の実際など)(例:ルワンダ)
- 「日本の幼児教育は国際的に見て本当に優れているといえるのか」
- 「相手は日本の幼児教育の優秀さを知らないと思うが、どうしたらそれを伝えられるか？」
- 「相手も自分たちの幼児教育には自信を持っているかもしれない。そうだとしたら自分に何ができるか？。『何しに来た？』とかいわれそう。」



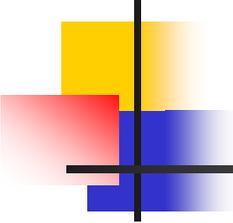
派遣前候補生がかかえる悩み(続き)

- 「カウンターパートには日本の幼児教育を理解してもらえるかもしれないが、子どもたちの親に理解してもらえるかどうか不安。現地では受験競争が厳しく、親が幼稚園に求めているものは学校のための早期教育。このような国においてどのような一石を投じることができるか？」
- 「大学で授業(保育者養成)をするなんて初めてだけど、何をしたいかわからない」「大学で授業をした先輩隊員がないので資料もなく、不安」 →これらの質問への回答はQ&A集で



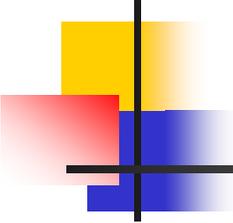
4. 派遣中隊員がかかえる悩み ー中西部アフリカ広域研修よりー

- 1. 任国の教育事情
- 2. 文化の違い
- 3. 要請に関する問題
- 4. JOCVに対する理解が乏しい
- 5. CP(カウンターパート)との関係
- 6. 活動の内容・方向性について
- 7. 語学・コミュニケーションの問題



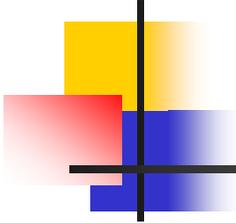
1. 任国の教育事情

- 教員不足
- 園の人手が足りない
- CAPED(公開保育)が機能していない
- 現地と視学官をつなげている現地の人がない。



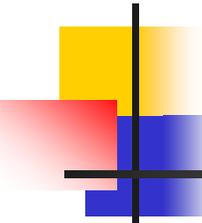
2. 文化の違い

- 環境、文化、国民性の相違。
- 部下や上司の許可なしに仕事ができず、自主的な仕事が考えられない組織文化。
- 他人の意見に耳を傾けない。
- 配属先に幼稚園に対する平等な感覚がない(トップクラスの幼稚園にだけ力を注ぐ)。
- 互いの考え方が違う。
- 指導主事が絶対的な権威をもっている(間違っても間違っているといえない)



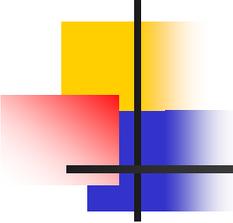
3. 要請に関する問題

- 要請と現場のニーズが結びつかない。
- 需要がわからない。
- 対象範囲(規模)が大きすぎるので広く浅い活動になってしまうのではないかと不安を感じる。自分ひとりに対してエリアの範囲が多すぎる。
- ⇄個に対してアプローチしている状況なので、広がり欠ける。
- 活動先の問題(要請との関連で):巡回先が多く各園との深いかかわりがなかなか難しい。
- 各園のレベルがちがうので、どこにアプローチするか、決めにくい。



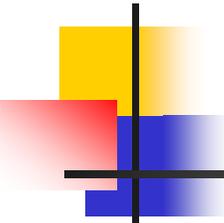
4. JOCVに対する理解が乏しい

- 配属先の自分に対する理解が乏しく活動しにくい。
- いまだに自分の配属先で私の位置づけをきちんと決められていない。
- 任国の人を受身である。もしくは共に活動できない。なかなか指導主事自身で物事を企画したり提案しても、私にやらせようというフシがみられる。
- 配属先と活動先との連携が乏しく、JOCVに対しての理解がない。
- 物質的要求をされる：露骨に物をくれと要求される。学校にどろぼう事件が相次ぎ、それにより物の要求を直接言われる



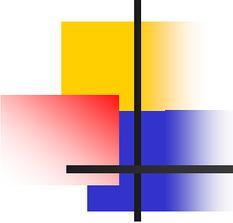
5. CP(カウンターパート)との関係

- 直接的なCPがない。特定のCPがない。本来のCPという自分と一緒にずっと動く人がいない(CPがない)。
- CPとの人間関係。
- CPが忙しく話し合えない。



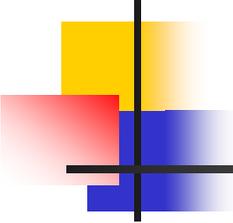
6. 活動の内容・方向性について

- この国式の保育にどこまで手を入れていいかわからない。
- 自分の活動の方向性を相談できる現地人がいない。
- 任国の教育に対してどこまで日本的な考えが良いのか、必要なかわからない。
- 講習会の内容が浸透しにくい。
- 幼稚園がお休みのバカンス中、どんな活動をしていいかわからない。



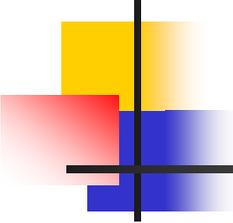
7. 語学力・コミュニケーションの問題

- コミュニケーションがうまく取れない。
- 言葉の問題があり、自分の伝えたいことがなかなか相手に伝わらない。
- コミュニケーションが難しい。
- 信頼関係を気づくのが難しい。
- コミュニケーション不足、言葉の不足（うまく話せない、ニュアンスが伝わらない）。
- CPや指導主事が忙しく、時間が合わないため十分な準備の時間が取れない。



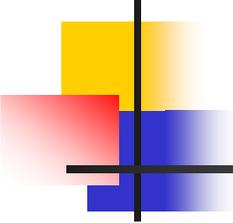
問題分析ワークショップ

- 詳細はビデオと配布資料
- 中心的な問題
 - 1. ニーズを把握する(Aグループ)
 - 2. 提案した技術を浸透させる(Bグループ)
- 浜野(オブザーバー参加)よりコメント
- 「なぜ」を考える。2つの問題は密接に関連している。



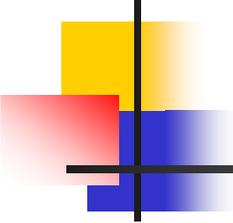
派遣中隊員がかかえる悩み(まとめ)

- ニーズがわからない
- 自分のやったことの効果が見えない(これまで何代も入って、何が変わったのか。実感が持てない)。
- 協力の効果をどう確認したらいいのか。
- 相手国の教育にどこまで介入していいのかわからない。
- 体罰やスパルタ式教育に疑問を感じるが、どうすべきか



派遣中隊員ニーズ(まとめと対応)

- ①活動の方向性に関して第三者の立場、専門的な立場からのコメントがほしい
 - →拠点での対応:(Q&A集やワークショップに参加してのコメント)
- ②派遣先のニーズを把握したり、活動の効果を確認したりするための調査手法
 - →拠点での対応:(Q&A集や評価ツール作成)
- ③資料や教材が現地語になっていると良い
 - →幼児教育ハンドブックの多言語翻訳



連絡先

- ご質問・お悩みはこちらまで
- hamano.takashi@ocha.ac.jp
- お茶の水女子大学・教材配布URL
- <http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~eccd/reports.html>
- ベトナム初等教育
- <http://www.ushiogi.com/viet-kaken.pdf>